を行られたのうなかながある。 反う 間様に成体には

とんど理解できない異常事であり、 精神から見れば同じように理解しがたい、 おそらくはた られぬ遠い昔に、「人間」という被造物が旅にのぼった。——それは、自然から見れば全くほ く、またいよいよ早いテンポで高め、またいうところの精神の創造なるものを勝利から勝利 だ一回的な化身であり、これら二つの面から見ても、その本質からしてあらゆる瞬間に外から る。この世の旅をつづける間に人間は、いうところの自然を支配する力なるものをいよいよ多 も内からもきわめて強烈に脅かされ、いよいよ深刻さを加える危機にさらされている存在であ 問われているのは、まさしく世界における人間の存在一般にほかならない。われわれに測り知 れにいよいよ明らかとなっている。それは決してたんに、他のいく分かはすでに準備されたシ 年の驚くべきもろもろの出来事もまたこの危機の徴候としてのみ理解されうることが、われわ ムが、古いものも新しいものもとひとしくこの危機の中にまきこまれている。危機をとおして ステムによってとりかえられる経済的および社会的システムの危機ではない。すべてのシステ とこ三十年来われわれは、人類史上最大の危機の発端に生活していることを感じている。近

現代の

どりついた途上の段階を、思い浮べうる限りの発端と対照して見なければならない。

然にたいして自己を主張するにいたったゆえんのとりわけ本質的な事柄、しかも特別に作られ 互いに理解し合い、話しかけたり話しかけられたりしたことである。互いに同時に依存しかつ その後はますます多くの度合において他の一人一人を独立の存在として認め、 糧採取や労働のために仲間と団結したことであり、 た事物から「技術的」世界を形成したことにもまして本質的な事柄は、人間が防御や狩猟、 独立する人びとからのこのような「社会的」世界の形成こそは、動物における類似のあらゆる 人間がいつかしだいに自然から抜け出し、また自然的存在としての弱さにもかかわらず、 しかもそのさいある程度は最初からすでに そのようにして

またそれとともにその途上におけるわれわれ自身の現在の地点やわれわれの特殊の大きな危機 ることを意味する。この人間のみの特性からこそ、あらゆる上下の曲折を含む人間の行路 に独立性を与えることを意味するように、人間特有の社会的創造は人間の存在に独立性を与え る能力や、したがって人間対人間の如き関係は存在していない。人間特有の技術的創造が事物 そこには臨機の処置やごく僅かな度合にもせよ相互の独立や、つねに互いに「自由に」観察す も理解さるべきである。 互の関係を全部的に規定しているのはまさにこの分業であり、 ない。多くの昆虫もまた厳密に分業的に建設された社会をなして生活している。しかし彼ら相 以外にではなく、作ることはできないし、また永続的な対象として計画し作成することもでき は類を異にするのと同じである。猿もまた見つけた棒か何かを梃子や土掘り棒や武器として用 営みとは類を異にし、それはちょうど人間の技術的労働が動物における類似のあらゆる働きと いる。しかしそれはただ偶然の機会から起ったことであって、彼らは道具を道具として、それ って、ただ彼ら自身の社会がその「本能的な」目的のために彼らを利用しているのである。 彼らはすべてどの程度にか道具

ている。 礎とする相互的認知および協力とから成る共同社会の形成および改造への進路が有力に行われ 人類自体のこれまでの発展においてもこの進路、すなわち増大しゆく個人的独立とこれを基 人間的社会へのこの途上において初期の人間がなしとげた二つの最も重要は歩みは、

生産し、 を通して各個人はそれぞれの特殊な才能資格において認められ用いられたこと、これによって ある程度確認することができる。その一つは、個々の氏族の内部でもっとも原始的な分業様式 同社会の間でも存在様式と機能の差異が認められ、また尊重されるにいたったことである。 互の援助をいよいよ確実な慣習や法に固め、そしていまや個人の間におけると同じように、共 る。そして第二には、異なる氏族がある条件と前提の下に食糧さがしや戦闘のために集り、 氏族は相異なる機能の担当者のたえず更新される結合の性格をいよいよ多く取得したことであ 社会、多種多様の諸社会から構成された社会が対立しており、この社会のなかで人々は生活し 領域すなわちその警察権力と官僚機構を具えた国家にたいしては、有機的機能的に組成された の秩序と安全を組織化し保証する様々な種類の権力中心が分立した。しかし狭い意味の政治的 よび相互的責任-れ以来、真の人間的社会が発展したところではどこでも、それは機能的独立、相互的尊重、 れることを感じたのである。 もかかわらず、氏族におけると同じように、自己の固有の機能的独立と責任が認められ確認さ また相争ったり助け合ったりした。との社会を構成する大小様々な社会の一つ一つの とれら共同体および協同組合の一つ一つのなかで、人間個人はあらゆる困難や争いに -個人的および集団的なー ―という同じ基礎の上に生起した。なるほど共同

このことは、 中央集権主義の政治的原理が、分権主義の社会的原理を従属せしめる度合につ

だけである。 現代生活の大きな混乱のなかにあって、個人は集合体にしがみついている。個人が身を埋めて いた小さな共同体は彼を助けることができない。彼の考えではそれができるのは大きな集合体 歩拡大のための万人の万人に対する闘争の結果として、国家間の古い対立に代って社会自身の 極印をもって自由な結合のなかに侵入し、 自由な結合をますます弱め押しのけたことではなく、むしろ政治的原理がその中央集権主義の れて変化した。そのさい決定的なことは、国家とくに多かれ少かれ全体主義的な形態の国家が が行われる。ただ確実に機能する経済・国家装置によってたんにうわべをおおいかくしている による現実的もしくは想像上の国家的利益の遂行であった。そしてこれとともに内部的な発展 ころで問題とされたのは、ただ隙間のない力の組織、スローガンへの疑いのない信従、全社会 形態の社会においても全体主義的形態の社会におけるとさして異なるところはない。いたると る以外にいかなる救いをも知らない。この原理を自己の原理となしている点では、民主主義的 間の対立が出現したという事情である。もはやたんに隣人の侵略心によってではなく、さらに のものをますます政治化したことである。とのようにして社会が国家に同化されることを要求 一般事態によっても脅威を感じている個々の社会は、集中化された権力の原理に完全に屈従す 秩序づけられた混乱をともなう現代の経済発展や、原料獲得および世界市場への地 そして個人はあまりにも喜んで個人的責任を取り上げさせる。彼はただ服従しよ その構造および内部生活を一変し、かくして社会そ

231

関係は無意味なものとなり、人格的関係は干からび、精神自体も一職員として雇用される。人 うとする。そしてそのために最も貴重な善たる人間と人間との間の生活が失われる。自律的な た技術のなかで労作の感情と節度の感情をまさに失なおうとしているが、それと同様に、変質 間個人は共同社会の身体の生きた部分から「集合体」という機械の歯車となる。人間は、 した社会生活において共同社会の感情を失なおうとし、しかもまさに一方では自己の共同社会

戻りはなく、ただつき抜けることしかない。だがわれわれは自分たちがどこへ行こうと欲して てではなく、 いるかを知るときにのみ、つき抜けることができるであろう。 この種の危機に人間がうち勝つことができるのは、その旅路の初めの地点に戻ることによ ただ与えられた問題を割引せずに解決することによってである。われわれには逆

への全き献身のうちに生活しているという幻想にみたされている。

すところの無制限な全世界的権力集中主義がさし迫っている。すべては、全世界を経営管理す し管理しようという人類の強固な意志によってのみ達せられるのである。ところがまさにこの 和を確立することから、はじめなければならない。そしてこの第一の目標は、いかなる政治的 |織の考案によっても達せられないし、ただ地球全土を地域と原料と人口に応じて共同で耕作 明らかにわれわれは、 従前のあらゆる危険にまさる大きな危険、すなわちすべての自由な共同社会を食いつく 社会的原理にたいする政治的原理の主権を奪い取るところの生きた平

る仕事を政治的原理にゆだねないことにかかっている。

権を企業家の手から集合体の手に移すことである、というであろう。だが、すべて はこの 集 の社会主義がいかなるものであるかという問題のうちに存するのである。用いられる概念のあ ちそれが成立するあかつきに、人類の共同経済がそのしるしのもとに成立するであろうところ ろうかどうかにあるならば、 彼らが社会主義的共同経済を決意し、 合体の下に何を理解するかにかかっている。もしそれが、われわれが国家とよびなれてきたも いまいさはここで他のどこよりもはなはだしい。人はおそらく、社会主義とは生産手段の使用 代社会の最悪の欠陥は、まさに、人びとがあまりにも広範囲に自己を代表にまかせていること 所有者によって代表されていると感ずることであろう。だが代表とは何であろうか。結局、 の制度であるならば、社会主義社会においてとくに変る点は、労働者がみずからを、 表に経済的代表がつけ加えられはしないであろうか。しかし多数の人びとが彼らの共同の物事 共同経済は社会主義的経済としてのみ可能である。だが現在の人類にとって運命的な問題は またそれとともについにはほとんど無制限な中央権力の集積が支配するように、政治的代 すなわち本質的に無組織な大衆がかれらの仕事をいわゆる代表者の指導にまかせるところ であろうか。そして「社会主義」社会では、そこではじめてほとんど無制限の代表 との問題の本来の意義は、 またそれに向ってみずからを教育することができるであ 社会主義自体についての問題、 使用権の

うちに現われ、それなしには成立しえないからである。 可能なまた適合した共同社会ー の決定にあたってみずからを代表されるにまかせ、 いよ乏しくなるのである。なぜならば、共同社会-ば多いほど、彼らのうちに存する共同体生活はいよいよ僅かになり、共同体性は ばまず最初に、共同の物事にたいする共同の積極的な処理の ――原始的なものではなくわれわれ現代人に しかも外部から代表されるにまかせること いよ

う。 集合体自体が生産過程の主体となること、 その構造および機関からして様々な集団の真の共同生活を可能にし助長すること、 ら成立していない共同社会の如きは虚構であり見せかけであり、途方もなく大きな虚偽であろ している。共に住みあるいは共に働らく大小諸集団の現実の共同生活とそれら相互の関係とか しいたえず引き直される限界線の問題、必然的に中央集権化すべき領域と自由にまかすべき領 にかかっている。内部的な決定的問題は原則的なあれかこれかの形のものでない。それは、 度にまで組織され、 あらゆる歴史の根源的希望は真の、従って全的に共同体的な内容を含む人類共同社会を目ざ それ故、すべては次のことに、すなわち生産手段の使用権がその手に移される集合体が、 って中央集権的代表は、たんに新しい秩序が絶対的に必要とする限度でのみ行われること 支配の度合と自治の度合、統一的な法と共同社会の要求との間に様々な限界線を設定する またその組織(種々の かくして多数の人びとが、人類の共同経済が許す限 「共同体」)もその限度にまで強力であること、 さらにこの

れが人類の精神的良心の任務であり、比類なき最高審であり、生きた理念の誠実な代表であろ 求からする不断の検討、変化しつつある歴史的前提につれて変る真の限界にたいする監視、方式の問題である。中央権力の暴圧にたえずさらされている時々の事態にたいし共同社会の プラトンの「守護者」は、ここで新しい化身を待っているのである。

共同である。また精神を彼らの主とよび、救済を彼らの約束の地とよぶところのかの共同体す にこそはじめて精神の共同である。それは努力の共同でありまたそれ故にこそはじめて救済の るのではなく、つねにただ現下の問題にたいする現下の解答として行われなければならない ある。共同体理念の実現は、他の理念の実現と同様に、一回限りに、かつ普遍妥当的に行われ 材料において形づくられることを欲している生きた形態の代表のことである。 なわち「宗教的」共同体は、 グマ化されてはならない。またそれは、出現するときには概念ではなく状況を満足さすべきで ざけなければならない。共同体は決して気分ではない。またそれは感情である場合にもつねに 知りかつ内に含むところの共同生活の内的心構えである。それは困苦の共同でありまたそれ故 心構えの感情である。 この生きた意義をもつために、共同体思想から一切の感傷性、一切の極端化および狂熱を遠 理念の代表と私はいったが、それは固定した原理の代表ではなく、まさにこの地上の日 共同体は、つましい「計算」や逆う「偶発事」や襲いかかる「不安」を みずからがえらんだのではなく、 むしろそとへまさしくつかわされ また共同体はド

からの仕事である。信仰の共同体は、仕事の共同体であるときにのみ真実のものである。 て道を拓くときにのみ共同体である。たしかに「仕事」が重要なのではない。重要なのは 仕えるときにのみ共同体である。それは、この道もない時代の藪を通してその約束の地に たところの現実、えらばれもほめたたえられもされないあるがままの現実において彼らの主に 向

事実に見出さるべきである。たしかに共同体の真の成立は、その成員が中心にたいして共通の、 うちに明示されたものとして認められないときには、おそらく知ることができない。しかしこ 他のあらゆる関係に優越する関係を有することから理解さるべきである。円は半径によって示 世界をももはやもつまいとして荒野に赴いた。だが神は人間が神とのみあることを欲しないこ してではなく、確証の世界としてである。すなわちこの世界にこそ中心の真理が示されるので 真実であり、より明瞭である。「社会的なもの」もこの中心の一つである。それはその部分と とを彼らに示した。かくして孤独の聖なる無力をこえて友愛の教団が生起した。ついに聖フラ たしかに共同体の真の本質は、それが一つの中心をもつという 円周の点によって示されるのではない。 初期のキリスト教徒たちは、 それがより現世的に、より人間的に、より愛着的に示されていればいるほど、より そして彼らは、神とともにある以外にいかなる共同体をも、またいかなる煩わしい 現世と並存する、もしくは現世を超越する共同体に満足し そして中心の本源性は、それが神的なものの -顕在もしくは潜在の

シスは、 聖ベネディ クトの範囲を越えて、すべての人びとと相い結んだ。

宇宙を目ざしてその大きな窓を狭い壁に切り開いたのである。 の危険をはらいのけた。精神はここでは他のいかなる場所にもまして旺盛であり、民衆、 場での集会において・ れることを欲した。 れる共同生活がすでに行われており、それはただあらゆる関係の直接性のうちにさらに完成さ 言葉にいい表わせないものの周りに、またそれを通して結びつけられていることを知っていた 然および生活の環境においた処、そとが真の共同体が生成する場所であった。そして市民 だが共同体は決して「建設」されることを要しない。歴史的運命が一群の人びとを共同の自 の個人的接触のうちに放射した。隔離の危険も脅かしはしたであろう。しかし精神はそ 中央に都市の神のいかなる祭壇をも必要としなかった。生きたそしてたえず更新さ 共同の問題は共同でー 協議され決定された。そして公共の事柄について経験された結合がそ - 最も好都合な場合には代表者によってではなく広 人類、

ぶちこわされている。 れる事柄を討議する時間もない。具体的な共同生活はすでに量の圧力と組織の形態とによっ 代の都市にはいかなる公会場もないし、また現代の人間は彼の選んだ代表者が代りにやってく 日 がそうしたことはもはや過ぎさって取り戻しようもない、 時も精神もきちんと分割されている。 芸術よりも労働が、政治よりもスポーツが人びとを相互に結びつけてお だがそうした結合はまさに実質的であり、 と私は反対されるであろう。 人びと

ざるをえない。なるほど、家族共同体としてある程度の共同生活を要求しまた保証するかに見 える家族がなお存在してはいる。しかしその家族とてもそれが陥っている危機からは目的結合 動や作用として外に現われる。個人は親密さを欠きながらもその精力を尽しての貢献を意識し として出現するか、それとも消滅するかどちらかであろう。 てこれに所属しなければならない。この不可避的な発展に反抗するいかなる「団結」も消滅せ うちとけたいっしょの集りではなく、むしろ経済的および政治的な力の大きな結合である。 れはロマンティックな想像の働きには不毛であるけれども、数量的にとらえることができ、活 は共通の利益や傾向にいっしょにしたがい、「直接性」にはなんの用もない。集合体はなんら

神とから共同体の再生が 生起するかどうか。 これによって 人類の運命が 決定されるように私 には思われる。有機的な自治共同体・ 引くことがあるとしても、共同体は回復さるべくもない。しかしさし迫る社会変革の流れと精 る新しい交わりのあらゆる高まりが、世界の共同体的内容の増大を意味するかに思われるとし るものである。回復ではなくて再生を。共同体は事実上回復さるべくもない。よし貸長屋での 近隣どうしの間のあらゆるささやかな助け合い、最高度に合理化された工場の休憩時間におけ 正しい確認(前提)と不合理な結論とのこの混交に直面しながらも私は共同体の再生を信 また時には正しく建設された村落共同体が議会にもまさる現実的なものとして私の心を ーそしてこれのみが形態づけられ組成された人類に適合す

が準備されているか、また準備されるであろうかどうかにかかっている。 手段使用の権能が移される集合体である。くりかえしていえば、すべては、 ぶことができよう して存在するにすぎない。共同体の再生を語るとき、私の念頭にあるのは、恒常的世界状勢で まつづけるであろう。上記のようにして更新することができた共同体にしても、ただ残存物と して国家的なるものが、各世代の人間の血肉をもって熱せられる機械装置たることをいまのま ることができるであろうー はなくて、 な共同体から建設されるであろう。民族は、共同体的内容を含む度合において共同体である。 今や崩壊にも等しい危機のなかから、純化され更新されて抜け出ないときは、依然と 変革された世界状勢である。新しい共同体 一によって私が考えるのは、変革された経済の主体すなわちその手に生産 -は、決して個々人からではなく、ただ小さな、またもっとも小さ ひとはこれを新しい協同体ともよ そのような集合体

理念と現実との関係に関するすべての問題と同じように、多くの精神的機敏、正しい振合につ 権主義と地方分権化との関係は、さきにも述べたように、原理的に処理される問題ではなく、 力状況に依存するという、超技術的な認識からも提起され解決されるべき問題である。 解答されるべき技術的問題であるけれども、それはまた、共同体内部の権力状況はその外部の権 時に経済的ならびに政治的単位であろうから一 新らしい共同体にどれだけの経済的および政治的自主性 ーが認められるであろうかは、たえず提起され なぜならば共同体は必然的に同

所の条件によって必要とされる限度でのみ行われるべきである。その限界線を引いたり引きな みずから共産主義を称し、すなわちやはり共同社会を目ざして努力していると称する諸国家に おしたりする当事者が良心に目ざめているならば、権力ピラミッドの土台と頂点との関係は、 いてのつねにやっかいな考慮をもって処理されるべき問題である。しかし中央集権化は、 独特の用語によってではなく、具体的に、共同の活動と共同の経験とによって結びついている 代表者から成るであろう。被代表者は彼らの代表者と、今日のように空虚な抽象、 形な選挙民大衆の偽りの代表者ではなく、共同体の経営管理においてその手腕をよく試された てもまた代表制は存在しなければならないであろう。しかしそれは今日の制度のように、 おいて今日行われているのとは全くちがったものとなるであろう。私の考える社会形態におい 政党綱領の

私は造形の時機における像と技倆との出合いを信じている。 化」を信じないと同じように、革命の胎内からのバクーニン的処女受胎をも信じない。しかし ないことである。もろもろの共同体から成る共同体のみが、自治共同体の名に値するのである。 の文書につみ重ねられたままにおかれるであろう。私は、新しい社会形態のマルクス だがもっとも本質的なことは、共同体建設の過程が、共同体相互の関係にも一貫しなけばなら 私がことに急いで素描した像の略図は、暴風雨がそれを開くまで、「ユートピア社会主義」